



京都府立医科大学附属病院広報誌

かもがわ

vol.
41
2024.1

特 集

—感染症について—



CONTENTS

- ▶ 特 集：いろいろな感染症
- ▶ 健康・医療の豆知識
- ▶ 病院で働く人々：看護師 中西 文美

感染症科

担当領域

当院は京都府で唯一の第一種感染症指定医療機関です。私たち感染症科は新型コロナウイルス感染症やエムボックス（旧サル痘）などの新興・再興感染症をはじめとして、様々な感染症の診療を行っています。私たちは常に最新のエビデンスを元に患者さんに最適な医療を提供できるよう心がけています。

外来診療について

近年増加中の梅毒や肺以外の結核症・非結核性抗酸菌症、輸入感染症（マラリア、デング熱、腸チフス、渡航者下痢症など）の診療を行っています。検査部や基礎の研究室と連携し、大学病院ならではの先進的な遺伝子診断・解析を積極的に行っています。このような取り組みにより、京都府のみならず関西エリアの病院から患者さんのご紹介を頂くことが増えてきました。

また当院はエイズ拠点病院でもあり、私たち感染症科医師が中心となって薬剤師・社会福祉士・心理カウンセラーを含む多くの医療者と綿密に連携をとり、患者さんの診療だけでなく社会的・精神的なサポートも積極的に行い、多くの方が安心して治療を受けられる環境を整えています。

渡航ワクチン外来

ポストコロナにおいて海外留学・旅行が再び活発化してきました。当科ではこれらの方に対しての必要なワクチン接種を行っております。当院では国産ワクチンのほか、輸入ワクチンも各種取り扱っており、皆様の幅広いニーズにお応えすることが可能です。ワクチン接種のためにご来院された方には渡航先の最新の医療事情や感染症情報もお伝えしております。ワクチン接種証明書（英語、日本語）の作成も可能です。ぜひ皆様が海外に行かれる際にはご活用ください。

入院診療について

私たちは上記疾患の入院診療だけでなく、他の診療科に入院中の患者さんが感染症を発症した場合にも一緒に診療させて頂いております。現在薬剤耐性菌は全世界的な問題となっておりますが、当科にはこれらの専門家が所属しており、最適な治療を行うことが可能です。



耐性菌検査・遺伝子解析の様子



微生物ラウンド



渡航ワクチン外来

呼吸器内科

担当領域

肺に現れる多岐にわたる疾患の診療を行っています。肺は気道を通じて外界と交通した臓器なのでいろいろな感染症が生じますが、今回は肺非結核性抗酸菌症の診療についてご紹介します。

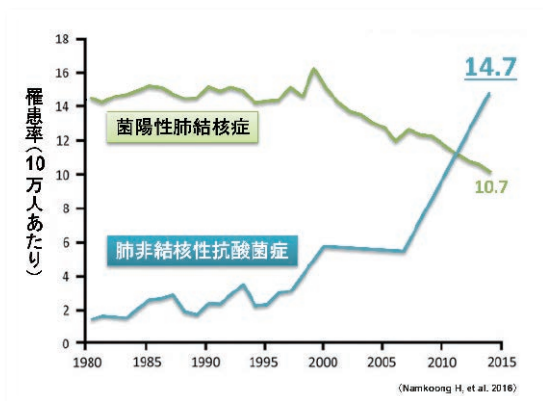
肺非結核性抗酸菌症の診療

当科では新型コロナウイルス感染症や急性肺炎などの急性の感染症のほかに、数ヶ月、数年単位で悪化する慢性の感染症の診療を行っています。慢性の呼吸器感染症の中で、非結核性抗酸菌症という病気の患者さんを多く診療しています。非結核性抗酸菌は、抗酸菌と呼ばれる菌種のうち結核菌とらい菌以外の菌のことを言います。結核菌と違い人から人に感染することは基本的にはありませんが、肺結核が年々減少しているのに対し、肺非結核性抗酸菌症の患者さんは2007年から2014年の7年間で約2.7倍に増加しており、近年問題となっている病気です。治療をしなくてもあまり病気が進行しない方がいらっしゃるため軽症の場合は様子を見ることもありますが、症状や肺の影が悪化してくる場合は薬による治療を行います。治療には複数の抗菌薬を内服しますが、難治例では吸入薬や点滴注射、筋肉注射を加えた治療を行ったり、状況により外科的に肺を切除することもあります。外来通院による治療でなかなか軽快しない場合や急に症状が悪化した際の入院治療も積極的に行っています。最近では、吸入薬治療が使用できるようになり、これまでの治療で軽快しなかった患者さんにとっても治療の幅が広がりました。当科では、患者さんに確実に吸入薬を吸っていただけるように、医療スタッフの指導のもと吸入の仕方や吸入器具の使用方を習得していただける体制を整えております。

非結核性抗酸菌は水回りや土壌など身の回りに存在しているため、菌が陰性となるまでの治療期間も患者さんによって異なります。一旦治療が終了しても再発すること多いため、「完治を目指す」というよりも「うまく付き合っていく」病気と言えます。当科では安心して治療を受けていただけるよう、患者さん一人ひとりとよく相談しながら診療を行っています。



診療の様子



肺非結核性抗酸菌症罹患率の年次推移

泌尿器科

担当領域～泌尿器科領域の感染について～

泌尿器科は、主に尿路および男性器を扱う外科ですが、泌尿器科領域の感染症の原因となる主な病態として、尿路結石・尿路腫瘍・先天性尿路異常・性行為感染・外尿道口からの逆行性感染などがあります。加えて、当院における泌尿器科手術では、その8割がロボット支援手術を主体とする悪性腫瘍に対する手術ですが、尿路結石症・女性泌尿器科・小児泌尿器科領域等の良性疾患の手術も大学附属病院に求められる重要な役割です。良性疾患の場合、手術を行うか否かが感染を機会に決まることが多いという特徴があります。

尿路感染症について

- ・「膀胱炎」は、大腸菌など直腸常在菌を主体とする感染で、「単純性膀胱炎」では頻尿・排尿時痛・尿混濁・残尿感を呈し、通常、発熱は無く、性的活動期女性に多い疾患です。基礎疾患のある「複雑性膀胱炎」では、高齢者では尿路悪性腫瘍や神経因性膀胱、小児では先天的尿路奇形が多く、再発を繰り返す膀胱炎では、基礎疾患の検索が重要となっています。
- ・「急性腎盂腎炎」は、発熱性尿路感染の代表的な疾患で、発熱、全身倦怠感などの全身症状と患側の肋骨・脊椎角部の圧痛（CVA tenderness）または叩打痛の局所症状が出現します。膀胱尿管逆流症・感染性尿路結石症・水腎症に伴うことが多い疾患です。



男性器感染症について

- ・「急性前立腺炎」は、38℃以上の発熱、全身倦怠感などの全身症状と排尿痛、頻尿、尿意切迫感、排尿困難、会陰部不快感、会陰部痛などの局所症状を呈し、前立腺生検や経尿道操作後などの下部尿路操作後と、それらの既往のないものに分けられます。下部尿路操作後の出現が全体の約10%を占めます。
- ・「急性精巣上体炎（副睾丸炎）」は、陰嚢部（精巣上体）の腫脹と疼痛・発熱を伴います。膀胱・尿道または前立腺の感染が射精管から精管を経由し精巣上体に達することで発症します。（通常、精巣そのものの炎症には至りません）



術創部感染

近年、ロボット支援手術や低侵襲手術の進歩により、術創部感染の頻度は激減しています。

循環器内科

感染性心内膜炎について

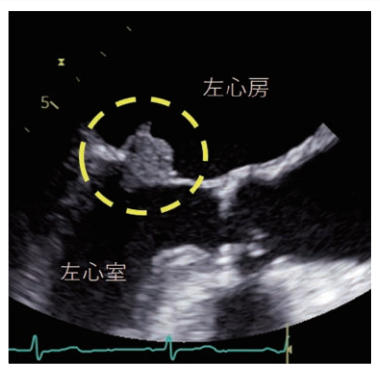
本来は無菌状態である血液に細菌が認められる状態を菌血症といいます。この時は患者さんには発熱などの症状はありません。しかしこの菌血症に症状を伴ってくると敗血症、あるいは血流感染症と呼ぶことになります。血流に入った細菌が、心臓の元々存在する異常血流部位（逆流や心腔内短絡）に到着し、細菌の塊（ゆう腫：下図左）を形成し大きくなっていくことを感染性心内膜炎といいます。適切な治療（原因の細菌に効果のある抗生物質の投与）がなされなければ、このゆう腫はどんどん大きくなり、様々な障害をもたらします。心臓は全身へ血液を送り出す臓器ですので、あらゆる臓器に塞栓症（ゆう腫が血流に乗って運ばれ、血管につまってしまうこと）を起こす可能性があります。これらの塞栓症は必ずしも症状が出現するわけではありませんが、脳への塞栓は、我々が最も恐れている合併症のうちの一つであります。ゆう腫は、脳塞栓を起こした部位で瘤を形成することがあります。この瘤が出血してしまうと脳出血（下図右）ですので、急に麻痺が生じたり、場合によっては生命をおびやかすような大変なことになります。

感染性心内膜炎を疑った際には

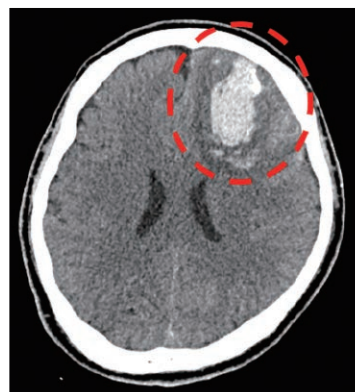
実際、目の前の患者さんに感染性心内膜炎を疑った際には、血液培養（採血をして、血液中にどのような種類の細菌がいるかを確認する）、心エコー（胸の上からの検査に加えて胃カメラの様に食道にエコーを進めて、より近くで心臓内を観察します）は必須です。同時に、全身にゆう腫の塞栓症が及んでいないか、を確認します。全身の造影剤を使ったCTや脳MRIを行います。その全身精査と同時進行で、早期に抗生物質の点滴治療が始まります。この点滴は1日に数回に及びますので、基本は入院下で行います。

感染性心内膜炎を予防するために

さて、この感染性心内膜炎を予防する為には・・・①風邪症状を伴わない発熱の持続は早めに受診してください：インフルエンザやコロナウイルス感染症などではないのに、高熱が続き上気道炎や肺炎、尿路感染症などの診断がつかない際は疑う必要があります。②健康診断を受診して頂き弁膜症がないか、の確認をしておいた方がいいでしょう：必ずしも感染性心内膜炎になる方に元々明らかな弁膜症がある、とは言いきれません。しかし、ある程度の重症度の弁膜症があるならば、歯科治療の際などに予防的に抗生物質を内服することが必要です。弁膜症があっても息切れなどの症状がまだ出現していない可能性は十分あります。ご自身の胸の音を聴いておいてもらってください。③人工弁の手術を受けたことがある方は、歯科治療の際に必ずそのことを歯科医に伝えてください。感染性心内膜炎の原因となる細菌は、口腔内や皮膚から体内に侵入しますので、日々の口腔ケアや皮膚を衛生的に保つよう心がけてください。



食道からの心エコーの画像
左心房と左心室の間に存在する僧帽弁に付着したゆう腫を認めます。



感染性心内膜炎に合併して
脳出血を起こした症例の頭部CT

臨床工学部 連載企画
vol. 5

医療機器の豆知識

「安全に患者さんを運びます」

感染症の中には、新型コロナウイルス感染症などのように、接触や飛沫により感染してしまうものがあります。入院中の患者さんにそういった感染症が判明すると、他の患者さんへのウイルスの広がりを防ぐことも大切な院内感染対策のひとつになります。

一般的な感染対策としてはマスクや手指衛生がありますが、病院内では、より厳重な感染対策が行われます。例えば、新型コロナウイルス感染症の患者さんが入院する部屋は、部屋の中が陰圧に管理され、ドアを開けると部屋の外から中へ空気が流れ込むようになっており、部屋の中の空気が外へ出ないようにしています。

検査等のためどうしても部屋を出る必要がある時に活躍するのが、写真（右図）の車椅子型アイソレータです。内部に HEPA フィルタを搭載し、ウイルスを外部に漏らさないようにしながら患者さんに移動していただく事ができます。

（画像提供/株式会社日本医化器械製作所）

栄養管理部 連載企画
vol. 24

栄養の豆知識

「食中毒予防について」

「食中毒」というと、気温が高くなる夏に発症しやすいというイメージですが、実は冬にも注意が必要です。

食中毒の原因のほとんどは「細菌」と「ウイルス」によるものです。「細菌」は高温多湿を好んで増殖するため、細菌性食中毒は梅雨や夏の時期に多く発生します。鶏肉に存在するカンピロバクターや加熱が不十分または未加熱の食材を食べたときに発症する腸管出血性大腸菌（O157）などがこれにあたります。一方、「ウイルス」は低温や乾燥した場所で長く生息することができるため、ウイルス性食中毒は冬場に増加します。中でも、最も多いのがノロウイルスです。

食中毒は正しく対策を行えば防ぐことが可能です。予防の3原則を押さえ、元気に冬を乗り切りましょう！

食中毒予防の3原則

◎付けない

手洗いや調理器具の洗浄をきちんと行い、生肉や魚は生で食べるものから離すなどの工夫で細菌やウイルスの付着を防ぐことができます。

◎増やさない

調理済みの食品は長時間室温に放置せず、保存する場合は清潔な容器に入れて冷蔵庫で保管しましょう。

◎やっつける

細菌やウイルスの大半は加熱によりやっつけることができます。特に、二枚貝や肉は中までしっかり火を通すことが重要です。





「臨床検査技師も感染対策に関わっています！」

院内感染対策のため臨床検査技師ができること。

病原微生物から患者さん、そのご家族、病院職員を感染から守るため、検査技師は日夜奮闘しています！



院内感染の原因となる病原微生物、薬剤耐性菌を検出する。

検査室では、院内で同じ仲間の微生物が複数検出されたり、薬の効きにくい耐性菌が検出されていないか常にモニタリングをしています。



原因微生物の伝搬経路を調べる。

遺伝子検査の手法を用いて検出された細菌の近縁性を確認しています。それによって、細菌の伝搬経路を推定することができます。



院内の教育活動にも参加しています。

教育活動も院内感染対策の重要な仕事のひとつです。医師、看護師、薬剤師等多くの職種と共に、手洗い等の感染対策手技の訓練に参加しています。

平時は感染防止に、アウトブレイク時には感染拡大防止のため取り組んでいます！



「“かぜ（感冒）”に抗菌薬は効くの？」

「かぜ」に抗菌薬は効きません。

「かぜ」は、ウイルスに感染することでおこります。抗菌薬（抗生物質や抗生剤と呼ばれることもあります）は、細菌に対する効果はありますが、ウイルスに対する効果はありません。そのため、病院で処方される抗菌薬は、「かぜ」のときに飲んでも効果は期待できません。

抗菌薬は、細菌を壊したり増えるのを抑えたりする薬のことを指します。抗菌薬は正しく飲まないと思われ副作用が起こる可能性があります。また、薬剤耐性菌（感染症治療で使う抗菌薬が効かない細菌）に感染するリスクを高める原因にもなります。もし取っておいた抗菌薬が残っていたら、薬剤師に相談して処分しましょう。

抗菌薬が処方されたら、

- ・医師の指示通りに服用する
 - ・取っておかない
 - ・あげたりもらったりしない
- ようにしましょう。

また、わからないことは医師や薬剤師に確認しましょう。



～病気と向き合う子どもとそのご家族のための滞在施設～ 「ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都」誘致決定！

この度、国内 14 か所目となる「ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都（略称：京都ハウス）」の誘致が決定しました。

病気と向き合う子どもたちは、大学病院等の設備・スタッフの揃った専門病院で治療を受けることが多く、自宅から遠く離れた病院に入院されるケースも多くあります。このため、ご家族の経済的、精神的、肉体的負担を少しでも軽減し、入院している子どもに笑顔で付き添っていただけるよう、京都府立医科大学附属病院と京都大学医学部附属病院の共同利用施設として、京都市上京区内に京都ハウスを建設することとなりました。

建設資金の半分は、地元で企業・団体・個人からのご寄付等を募って、「HOME AWAY FROM HOME」（わが家のようにくつろげる第二の家）をコンセプトに、2026 年秋頃のオープンを目指して整備してまいります。



1月16日 関係団体で共同記者発表を行いました。

病院で働く人々 case 6

緑の下の力持ち

感染対策部／看護部 感染管理認定看護師

なかにし あやみ
中西 文美

異色の経歴

「私、経歴がちょっと人と違いますけど、私で大丈夫ですか？」こう切り出した中西さんは、感染対策部に所属する CNIC（Certified Nurses in Infection Control；感染管理認定看護師）。CNIC とは、院内感染の防止等、院内全般の感染症対策を行う認定看護師のことです。

元々は手術室に所属していた中西さんですが、初めから CNIC を目指していたわけではないのだとか。大学卒業後当院へ入職し、研修時に憧れを抱いた念願の手術室に配属された中西さんは、その後、海外を見てみたいと一旦退職し、オーストラリアでワーキングホリデー、マンマーで医療ボランティアを経験。帰国して当院手術室看護師として復職した後、目標管理の面談で CNIC を勧められ、今につながる最初の一步を踏み出しました。

見えないところで

感染対策は病院内のあらゆる場所で不可欠。医師や薬剤師、臨床検査技師と院内の感染の状況を共有するミーティングや、病棟や中央部門をまわっての個人防護具の着脱や手指衛生の遵守状況、環境等の情報収集・分析・フィードバック（ICT ラウンド）、医療関連感染（カテーテル関連血流感染や手術部位感染など）の予防活動等、日々の仕事は多岐にわたります。

直接患者さんに関わるわけではありませんが、病院にとってはなくてはならない存在なのです。

いつだって現場ファースト

「CNIC は、通常の看護師のように所属部署は決まっていません。院内のあらゆる部署をまわって感染対策状況を見て、問題や悩みがあるようであれば一緒に悩みます。現場にとってベストな対策を考えたいから、誰よりも現場に足を運んで、現場と一緒に考えたいんです。」

終始楽しそうに話をしてくれた中西さん。今日も感染からみんなを守るため、院内を見回りに向かいます。

*AST ラウンド：医師、臨床検査技師、薬剤師、看護師で抗菌薬の適正使用に関するカンファレンス、見回りを行うもの。



Daily Schedule

8:30-	有症状者などの電話対応
9:00-	ミーティング
14:00-	ICT ラウンド
15:00-	AST ラウンド* 病棟対応、 情報収集等

